１９０４年４月から１９０５年４月まで

この年は、日本の国の歴史と同じように、学校の歴史においても出来事の多い年であった。

学校は開校以来１７年目にして、初めて学校らしい校舎で教育を行うことができた。

最初の校舎は、多少は手入れされた厩舎の中の小さな２部屋であった。道庁でこの建物に礼拝堂と裁縫室、二つの教室を付け加えてくれた。７年余りの後に、学校は政府の古ぼけた建物に移ったが、その建物は古くて天井も低く、窓には横木が打ちつけられている、だだ広いものであった。（注　政府の建物ではなく、北海英語学校の建物である）

この年、１９０４年４月、日当りの良い礼拝堂と教室、それに充分な広さの寄宿舎を伴った新しい校舎で、多くの生徒達と学校が始まった。

ウォード先生がウエルズ先生の後任として、西日本伝道協会から着任した。

大村先生は１０年間、教鞭をとってこられた師範学校を退職した。田中先生は、もっと多くの時間を所属教会（組合教会）で働いて欲しいと強く要望されたので、８円相当の贈り物を差し上げて学校を離れていただいた。替わりに大村先生が、１年間を通して、午後の勤務をされた。

谷口先生は２年間勤務したが、女子学院へ行き２年間の勉強をはじめた。ミリケン先生は親切にも、我々のためにもう一つの奨学金を用意してくれた。

１９０４年の２月にロシアとの戦争が始まったが、それによって生徒の数は減少する様子もなく、却って増えたようである。８７名の新入生が入り、今までに最高の数となった。

これらの新入生のうち何人かは、昨年度不合格になった生徒である。新入生「読本Ｉ」のクラスは、人数が多すぎたので分割の授業にした。そのために、既に過重になっている仕事が更に過重になった。その上、この戦争で「兵士達を支援する仕事」が加わった。

学校は３２０個の包帯と１００本の赤たすきを、また５００個の慰問袋を作った。包帯と慰問袋を作るためのお金や、たすきを作るためのお金の一部は、募金で集めたり学校で拠出した。

ウォード先生の指導のもとで音楽会が催され、３０円近くの収益をあげた。学校が集めたお金の総額は２００円近くである。慰問袋の布代だけで４０円かかった。

戦争が始まってまだ１年しか経っていないが、この年、出征兵士の見送り、帰還兵士や戦没者の遺骨の出迎えに、駅に行くようにとの通達を年間で８０回以上も受けた。このようにして、天候の如何を問わず何時間も費やした。